

市町村教委（諏訪地区）と県教委との懇談会【概要】

1 日 時 平成 23 年 7 月 19 日（火） 9:45～12:00

2 場 所 諏訪教育会館 講堂

3 協議事項

（1）中学校 30 人規模学級編制について

【県教委】

私共とすれば、中学校 30 人規模学級編制については、学年進行により中学校 2、3 年生へ拡大したい。これが強い気持ちである。ただ、現状は、基本的には予算の拡大は極めて困難な状況。様々な見直しも考慮しながら進めていかなければならない。

この懇談会において、検討いただきたい案として A 案と B 案とある。A 案は中学校 30 人規模学級を学年進行により中学校 2、3 年生へ拡大する。B 案として活用方法選択型教員配置事業を現行メニューのまま実施をし、当面、第 1 学年に止める。基本的に私も A 案を進めたいが、市町村教委の皆さまの方で B 案も考えたいというところがあれば、最初にそんな考えを聞きたい。

【市町村教委】

私共としては、H 中学校に導入し、今のところ、結論的には私の立場では有難かった。その理由はいくつかあるが、一番は小学校が 30 人規模学級であること。その事に対して、中学校は普通の規模であったが、一つの教室の子ども達の数を見ただけでもギャップがあると昨年までは強く感じていたが、今年の H 中学校の一年生を見させていただく限りにおいては、その意味でのギャップは非常に薄かった。

具体的な事で話すと、30 人となって H 中学の場合には、1 年生では、特に数学等は少人数でのやり方が実現出来ている。見た時に数学とかは 20 名という事でさせていただいているので、非常に子ども達は中学 1 年生としては、はつらつとしたというか小学校の延長としての活気ある授業が出来ていると思った。それから先生方に聞いても昨年までに比べてやり易いと言っている。細かい事と言うと、中学 1 年生は中学校という新しい環境に来たばかりであるところ、中学校であっても小学校の先生と同じように話がしやすいと言う事も生徒達が言っていると言っている。それから、友達同士の間関係が密になって、友達が何か 3 つの小学校から来ているが、その 3 つの友達と時間的にも早く仲良くというか慣れることが出来た事を今年 1 年生を担当している先生方が初めて聞いたと伺った。何かと中学 1 年は、中学校へ来ての不慣れという雰囲気の中で、当市において、また、H 中学校においては非常に有難かったと思っている。

【市町村教委】

N 小学校で導入させていただいた。T 中学校も該当していたが、時期的にきつかった。それ以外については、保護者の声として非常に有難いという声が聞こえてきている。私自身 30 人規模学級を大事に是非、拡大して進めていただきたいと思っているが、その時に何と言ってもそこに努めている資質の問題、これが全てである。30 人規模であろうと、36、37 人いようと先生方自身の資質の問題、その部分を同時に考えていかないと、どんなものをどう組んでいってもやはり難しい問題が起こる。

【市町村教委】

昨年9月議会に理事者の方で少人数学習を中学校へ進めたいとして、進めてきていた。そこへ、県より30人規模学級を中学校該当する事で有難かった。単費の教員だけでは、非常に厳しいところがあったので、少人数加配の県の教員を充てさせていただいた。4月下旬、授業参観が初めてあった。その時、保護者の参加があり、アンケートを取ったが、昨年来からのそういう課題があったので、教室へ行った時には40人のクラスを想像した時には本当に有難い事だった。

今、27名クラスで教室がゆったりしていて、机間指導等も出来るし、A4版の机で、中学の教室が40人だといっぱいである。いろんな面で子ども達と担任の先生のふれあいの時間が40人だとなかなか出来ない忙しい状況。そして何よりも1校なので、保育園から10数年一緒。従って、人間関係が固定してしまっていて、トラブルが起きた場合には修復が出来ない場合も事実ある。出来るだけ少人数で個々にあたっていける。それから1年から2年にかけて学級編成替えがあるので、そんな面でいろんな友達と保育園来一緒の誰ともなった事がない事がないように同じ子ども達としていけるように、本当に30人規模学級は有難いし、教委としても理事者に引き続きお願いをしている状況。

【市町村教委】

県から話があった時に、当該校の校長と話をした。その時に、学校現場から言われたのが専科連動出来ていない点が大いとの事。先生の空き時間がほとんど無くなってゼロである。それからいろいろ問題対応する時に、ちょっと時間の余裕がある先生が欲しいが、その余裕が無い時にかえて30人規模学級よりも少人数加配の方式が良いと言われた。私共それに対してどういう支援が出来るかという事を合わせて考えてこの30人規模学級を進めなければいけないとその時考えた。何とか早くしていただければ、市町村で出来る範囲が何かないかという点も考えられた感じがする。いずれにしても、現行の少人数とそこへかぶってきた矛盾点が出る学校が必ず出てくる。そこが一つの課題と思っている。

【市町村教委】

30人規模の話しを聞いた時に、私自身は、基本的には教科の面についても、或いは学校経営についても人数が1学級当たり少ない方が良いので、その方向でとの気持ちはあった。2校のうち1校が30人規模に該当するとその校長と具体的な事について詰めをしたが、たまたま11学級が1学級増えて12学級と、そこで11学級加配が外れてくるという事でプラスマイナスで変わらない。学校長が心配されたのは、結果的にはその時点で、学級編成をも一回、職員構成をしていく事は難しい。結果、少人数との選択制を選ばせていただいた。そういう中で、1学級分時数が増える訳で教員一人当たりの空き時間が非常に厳しくなってくる。中学の場合には生徒指導と連動してくるので、1日のうち空き時間が無い、又はあっても短時間という状況が予想される。日記だとか提出ノートや学力的な部分を考えて、十分手が入らない現象が起きてくるのではないかと不安が、私の方へ話があった。

いずれにしてもその事が、今年度の課題として常々校長達と話を詰めていく中で、来年度以降どうなるかという話をした時には、方向としては、30人規模が実現できたからその方向を推進していく事が大前提として考えていただければありがたい。と同時に、付随する問題として、実際に今年踏み切っていただいた学校が、その教員の持ち時数との関係で、実際子どもへの提出物、或いは日記等での手がどの程度入るのか。或いは相談等はどうか。各教師はそれぞれ一生懸命やってくれている。その中で、そこら辺の兼ね合いが住民には周知していかなければならない課題。ただ、方向とすればこれ

は是非、推進して行く方向と考えている。

【市町村教委】

当町では、30人規模学級というのは、大変、少子化が進んでおりまして、一昨年、2校が統合されまして、H中学校が出来た。そこで新しく、今まで二つの中学校は本当に一クラス30人くらいの一学年一クラスの学校だったが、新しく統合された事で子ども達が今、きちんと生活を始めている。学校の中では少人数制による授業を単費で教員採用しているので、今のところは特に問題なく進んでいる。私個人的に思うのは、30人であろうと30数人であろうと先生方のコミュニケーション能力のようなものによって、学級運営が上手くいくとか、いかないと凄く大きな問題だと思う。

やはり、県で採用の時に学力だけでなく、子ども達をまとめる力、コミュニケーション能力みたいなものを重視していく事によって子ども達が生き生きと学校で生活できる環境が出来るのではないかと考えている。

【県教委】

過日、市町村教委代議員会があった。その席上で、「削減ありきという事ではなくて、必要なものは予算として要望していくべきだ、その方向での今後のやり方は考えられないのか」というご発言もあった。今回、提案させていただいているのは、どちらかというと消極的な考え方である。また、現状とすれば、なかなか予算を拡大していく事は非常に困難な状況なので、より現実的な路線を歩もうとすれば、説明したような見直しをしつつ、2年、3年へ拡大していく。この辺が私共とすれば現実的な方法かと考えているところである。

【県教委】

消極的な考え方と話が出ましたが、実質的に実現を拡大するために、少人数規模学習から全部人数を回さなければ実質的に増えないわけではない。今年は37人実質的に増えている。その辺の実質的に増える数字は何人なのか。

【県教委】

実質的に増える数字は、まず、1案でいきますと167人分が実質的に増える。少人数学習プラス167人分増えるというものである。2案は、少人数学習の分プラス105人増えるというものである。ただし、どちらにしても見直し、今までの不登校や少人数など見直す必要があると思っている。それで、1案の方に週4時間で英語をやった場合の加配を少人数で行うとなれば、それは今のところ考えていない。現実的に少人数の加配をこれ以上増やすのは無理なので、更に増えていく。増やさないといけないと思うと授業の見直しが更に必要。それから2案で行くと、今、少人数学習を数学と英語が出てくる。223学級と105人で328人。その分は数学、英語だけでなく他教科で全て教員を確保できる。他教科への拡大というのが出てくる。

【市町村教委】

他の部分の縮減の中身をはっきりしないと、県が行っているのは数合わせになるのではないかと。数合わせになるとしたら、本当にそれで良いのかと疑問を持つ。

【県教委】

学習習慣形成では、大規模校で一部見直しをして、0.5人分を4人分減らした。実質2名。それと不登校等全学年を一部非常勤化するので、小学校の常勤を非常勤させてい

ただいたり、中学校を一部非常勤化等で一般財源化の持ち出しを少なくする。人数合わせというよりは一般財源との関係。

【市町村教委】

例えば、ブロック間異動や校種間異動という基になるものはあるとしても適材適所というものがある。そうした場合にその人達を敢えて異動させなくてはいけないのかどうか。そうすると、担任をして学年主任をしていて、そこへ教務主任を学級担任として充てているが、現実、その教科の先生が足りなくなるといった問題。或いは、ここ数年の当市の新規採用教員をみると、数年で休んでしまう先生方が何人もいた。採用の時に何を考えていくのかという問題。採用の方法そのものが民間の会社では大きく変わってきている。そういう諸々のものを同時に思いきった改革をしないと、最後は教育の質の問題にいく。

ペーパーテストで何百点も取らなくても、馬鹿やったような生徒の方がよっぽど今の子どもを元気にするには、バイタリティがあって力があるのではないかと私自身は思っている。ペーパーテストで点数だけ取れて、面接で良い事言えて、みんなこれ訓練、訓練で大学時代にやっているから上手い事言うし、作文も書くかもしれない。もうそんな時代は終わっているのではないか。もっと30人規模学級を進めると同時進行で、もっと、抜本的に改革を考えていかないと現場は変わっていかない。いろいろと丁寧に進めていけば行くほど、人間は我がままですから要望だけが噴き出す、これもまた現実。こう考えていくと、同時に考えるものが大事だと思う。大変な苦労を県がしていると思うが、何か限界になっている。そういう時代を迎えてしまっていると私は思う。

【県教委】

非常に重要な課題だと思っている。教員の数を増やす、それに見合うだけの人材が果たしているのかどうかと言う事と思うが、採用の問題、異動の問題等々関わってくる訳だが、採用の問題、異動の問題等についても今のご意見を得て、どうやったら良いのか、同時進行でとの話もあったが、私どもとして考えさせていただきたい。

【県教委】

全くその通りでして、セクハラから始まって酒気帯びと不祥事の話ばかりで、本当に嫌になる。その後をどうやっていくかというテーマである。採用の仕方は採用の仕方で県教委が考えなければいけない。しかし、県教委が現場の先生方一人ひとりのトレーニングを出来るかどうかであって、私はやはり校長先生が果たす役割、実際の企業は現場でもって指導していく。中小企業は親父がやるかもしれないし、大きな会社になれば課長、係長がやるわけで、校長は何をすべきか、主任は何をすべきか、市町村教委は何をすべきかまで戻って考えないと、県教委だけ言ってみても絶対解決しない。

今回の中で一つお聞きしたいのは、30人規模学級を優先して行こうと思っているが、予算は通るかどうか分からない。2年への進行も出来るかどうか分からない。しかし、それだけは是非、やらせてくれと知事と話をする中で、30人規模に配置をすると今、説明したように他のところは減っていく。そうすると、余裕が無くなる。担任の数は多くなるけれども余裕は無くなる。与えられた状況の中で、どちらを選択するか。今のままで行くと担任の数を増やすことで、少人数学習を減らしてください、不登校の対象を減らしてください。どこかで減らしてもらわざるを得ない。それでも少人数学習を進めていくという事でよろしいかどうか。現実にそこがポイントである。

【市町村教委】

少人数の学習集団形成をやってきた。数学と英語ですが、ここで一番大切にしている精神は、出来るだけ子どもの能力にあって、思いっきり学びを伸ばそうと始まったと思っている。それが上手く行かなくて、やっぱり30人規模かなと印象を私は持つ。この十分な総括があったのか疑問がある。人間的に言えば、小さなところから大きくいくのだから、人間的な教育はあるのでしょうか。しかし、その子の個性を伸ばすとか、もっと伸びる子は伸ばそうとか、それにはどうも長野県の教育の取り組みが不十分だった。それよりは、そういう面から考えて少人数なのか。学校によって違うが、中学へ行って結構伸びる子がいる。それは、中学も結構やってくれたと感じる。どうも少人数学習集団の個に応じるところが案外働いていると思っている。その県の教委の新しい制度へ、今の辺りは、残念ながら切っていかなければならざるを得ない。その総括を上手くお聞かせ願いたい。

【県教委】

そこが大きな問題である。ただ、はっきり言って、田中知事の時に小学校4年までは県で見て、後5、6年は市町村が見ましょとスタートした。小学校6年までは全校少人数学習にした後で中学校をどうしようかという話して、中学は一気には少人数規模学級に持っていくのは無理だから、それで数学と英語と少人数規模学習にしようとする流れである。この流れからいくと少人数規模学級が実現出来れば、少人数学習は多少減っていてもこれは、小学校からの流れから行くと少人数規模学級を尊重する方向で良いだろうと思っていた。現実には中学になってからこれだけの少人数学習集団編成をして学力上がってない。実際は、小学校よりも中学校の方が学年で全部悪くなっている。ここ数年の中で見ると少人数規模の学習集団編成が数字には出てきていない。私はデータのしか見て申し上げてないので、いろんなご意見あるでしょうが、数字的には中学になってむしろ悪くなっている。それで、今の事例で30人規模学習が可能になっている学級と35人以上との学級との数字を見ていくと不登校も学校の成績も少ない方が良い数字が出ている。そういう中で進めて行こうとしている。しかし、40人規模学級でも他のところのいわゆる余裕があるところに先生を置いた方が良いのかどうか。それは選択制ですから最終的には学校のご判断である。

【市町村教委】

総括的に言うと残念ながら、中学で落ちた。中には中学で結構良かった点もある。そういうところも見て、せっかくやってきた方法が、良いところはこういうところが良くて、こういうところが悪いのではないかと、そこを県教委ではやり難いとは思いますが、そこまで判断した上で、やっぱりそれなりの効果が上がっていると認めるところもあつたという上に立って、なお、やはり少人数だというお考えでよいのかどうか。

【県教委】

少人数学習と少人数学級との関係ですが、お話の個に応じたという時には、習熟の程度に応じたとか学習をイメージしていると思うが、残念ながら習熟の程度に応じた学習は年々、現象傾向にある。

今回の場合も決して少人数学習の今の精神をそのまま踏みにじるようには私達も考えてはおりません。例えば、英語で3クラスで習熟の程度で応じた事をやろうと思えばクラスを変えたりと担任の先生の判断で出来る。要はその学校の校長先生や数学・英語の先生がどやってマネージメントしていくに尽きるのではないかと。

【県教委】

いずれにしても、先ほど確認させていただいたのが、基本的には2、3学年へ学年進捗により拡大していった欲しいのが基本的な考え方である事は確認させていただいた。ただ、見直しを改めて聞いてみると、いや待てよというお考えももしかしたらあるかもしれないが、ここに示させていただいたのはあくまで例であるので、確実にこういう方向で行くわけではありません。文科省も定数改善の関係で中学校1年も35人基準でという考えもあるとお聞きしてもいる。ただ、概算要求の段階で実際にはどうなるか分からない。去年の小学校2年までの拡大という概算要求ではあったが結果的には1年までという事もあった。そんな事で中学校1年もどうなるか分かりませんが、仮に中学校1年が35人基準になるとまた、ここにある削減の見直しも更に小さくなる可能性もある。これからも情報については、出来るだけ県教委から市町村教委の皆さま方にもお伝えしていきたい。その中でご意見をお聞きしながら、方向を決めていきたいと考えている。

(2) 学力・体力の向上について

【市町村教委】

学習指導推進委員会は、校長が委員長を務める組織。毎年研究テーマを決めて、今年度は学力向上として算数・数学で実施している。委員会が学力テスト問題を作成し、小6と中1で全児童生徒が受検し、結果を中学校区毎に分析して、指導改善に努める。

後は市内の全校で情報公開しながら指導改善の方法を探るという形で進めている。もう一つは、夏休みに市教委と校長会の主催で教職員の研修日を1日設けている。そこでも学力向上について、分散会で意見交換する事を設けながら継続している。

【市町村教委】

業者テストを一斉に行い、各中学校区単位で分析と指導方法について検討する。教育委員も参加して検討したいと思っている。課題は多いが、どうも学校長が変わると色が変わる事がある。そこをどうするかと思っている。余談になるが、体力でも様々の学校で取り組みがある。校長が変わると変わってしまう、継続性がない、広がりが無い。せっかくある教科でいろいろ研究しても、その研究した良さを他の教科へ広めようとし無い。次の年度へ引き継いでいただく継続とそれから展開というところで考えなければいけないのが課題である。

【市町村教委】

「学力」という言葉を校長先生始め一般の先生方が私風に言うと、普通に狭い範囲で考えている印象を感じている。当市では、民間のボランティア団体の方が中心になって、毎朝、市内の保育園・幼稚園から小中・高等学校まで全員、全校が朝10分間読書をずっとやらせていただいている。その成果や効果が、一般の方から子ども達読書によって成長する部分がいっぱいあるという意味合いで読書を始めて約6、7年経った頃から聞けるようになった。その事から考えて教育とはこういう事をやると決めたら継続しなければいけない。それからやるからには、徹底してやる。徹底してやってくれるかどうかは、その子ども達に直接関わってくださる学級担任である。

昨年度から新たな学習指導要領が始まる中で各教科言語活動に充実を訴えているので、校長先生、教頭先生に聞いた時に各教科言語活動の充実を先生方はみんな良く解っているかと、相変わらず国語だけが言語活動充実だと思っている先生はいないかと聞いたらいると言われた。国立政策研究所へお聞きしたら、確かにまだ、学校現場が言語活動の充実を意識しないで学校教育、小学校は新しい指導要領をスタートさせてしまって

いるが、そこをいち早く、全職員に意識させるかどうかで今後、学校間の格差は出るとお聞きしたので、今年度、読書に関する学習指導要領との関係という意味合いの悉皆研修的なものを年3回するように計画している。

いずれにしても先生次第という事で、全国学力・学習実態調査なども業者に採点を依頼する事も良いですが、採点そのものが教師自身の指導力向上を見直す唯一の具体的な事実になるという事でもって、現場の校長先生方が数校の学校で先生方自らが一昨年、やっていただいた結果の報告してくれたので、その事を現場の他の校長先生方にもお願いして自らやる。そういうような一つひとつについて、そこにあるところからやっていく事が非常に重要である。

【市町村教委】

学力向上について、一つは30人規模学級の話が出たが、私は30人規模を推進していく事は非常に有難い。全教育活動そういったものを通して、環境づくりをしていけば、当然のことながらそういった環境の中で学力、或いは体力を課題としていけば、当然、その集団の一つの営みとしてそういうものに向かって、教師も子ども達も一致結束してやっていく環境が生まれると期待している。そういう意味で、今まで少人数編成が果たしてどうだったのだろうか、自分ではある意味、十分、果たして成果として繋がっているのかもやもやしていたが、そういう面では今回、30人規模の方向へ進んでいって、先生方に自分の学級をいろいろな角度から積み上げていく。その方法の一環として学力、或いは体力を考えていったらどうかという形で繋げていくその脈絡ができないかと考えている。

それから具体的なところでは、授業がもっと良くなる3観点と言う事を示していたが、これは、非常に吟味された良いものだと感じている。ただ、受け止める時にあまり文章で書くと、なかなか活きないと、ぎりぎり絞ってこういった形で分かりやすく示していただいたと思うが、受け取るについては、こここのところに、日々授業に当たっている先生方であろうと。こここのところを徹底的に掘り下げていく。この3つのポイントを、本当に1時間の授業が味を持って構成されているかという事を検証しなければいけないと思っているが、そここのところが大きな課題と感じている。

前回、教育課程の中で、総合的な学習、生きる力という事が出されて、ここで学力に伴って教科時数が増え変わってきているが、私は前回の総合的な学習、生きる力については、決してこれは10年間無駄ではなかった。ここから得られた財産をもう一回検証して、確かに時数が変わっている中で、この生きる力をどのように繋げていくかを工夫していかなかったら今までの事が無になってしまう。先ほどから継続という話も出ているが、やはり、根幹となるそういった部分を時数が新しくなる中で、一番の工夫していかなければいけない。10年間通して培ってきた力を繋げていかなければいけないと感じている。そんな中で、授業改善、補習指導。特に補習指導は徹底的に家庭学習が足りない。定着するには、学校でみんながお互いに考え合って思考力や判断力、探究力を深めながら、定着するなら家庭学習をもう少し工夫していかなければ、学力の定着は得られないと感じている。そういう意味では客観的なデータを良い形で取り込んで、そして、それを課題として学校も教育委員会もその克服に向けて工夫して取り組んでいくことが重要と感じている。

【市町村教委】

校長先生に校長裁量で各学校の経営を大きく任せている。校長先生と先生方との風通しの良さというものが子ども達に影響が大きい。教育環境を整えるという事で、単費で可能な限り教員採用をしている。少子化も一人ひとりの子どもに目を向けられる事で不

登校など少ないが、一人ひとりのケアを大切にしている。家庭学習の時間が少ないという事でこの定着についても今後、問題となる。体力向上については、学校統合に基づいてスクールバスを出しているが、スクールバスを利用する事で子ども達が歩く距離が減ってしまう事がある。従って、今、中学校で4km以上の子どもはスクールバスを利用しているが、どこでバスから降ろすかなど、これから小学校も閉校、統合にもなるので、そのあたりも考えていきたい。

【市町村教委】

幼保小中一貫教育という事で以前から進めている。なかなか理想どおりいかない。教育研究会を年2回実施している。共通の事として、少人数学習で細やかにやっていこうとここ数年来、単費の非常勤や講師を雇用している。今、小中に数名ずつ配置している。きめ細かな事を大事にしていきたい。小中ともドリル学習の継続と家庭学習が足りないのが課題である。教委主催で学社連携懇談会がある。PTA、青少年健全育成等関係団体と教委で家庭生活が基本である事で取り組んでいる。家庭環境も悪化してきている。子ども達が家庭で安定した生活をする事がやはり学力向上に繋がる事で様々な方が集まって懇談をしたところである。幼保小中の学校保健委員会があり、そこで、食育を中心に生活のデータを蓄積している。そこを検討して体力向上にもつなげていきたい。いろんな体力を養うための取り組みを継続する事が大事。中学校でも行事など企画に合わせて主になわとびなど取り入れている。また、競歩大会などもあり、体力を付けていきたい。最近では歩かない。4、5km以上は保護者が車で送迎出来るが、近い方も便乗したら、祖父母が送迎する方もおり、このあたりの意識の改革も必要。学力と体力と関連付けてやっているところである。

【県教委】

本日、それぞれの先生方からお話しをお聞き出来、勉強になった。教育問題は最終的には私たち経営に跳ね返ってくる。経営という立場から教育委員会に参加させていただいている。教育も基本は人、人の力、人間力だと思う。30人規模学級の導入も学力・体力向上も最終的には、人間としての力をいかに高めるかだと思うので、その事で地域が良くなり、長野県が良くなり、日本が良くなり、世界に向けて活躍出来る人間の育成に繋がると思っている。

正に教育は50、100年先の日本のあり様、方向づける大事な事である。大変大事な事は、問題が起こる、それを人のせいにしたら何も解決できない。良い事は人のせい、悪い事は自分のせいとする事が社長としての義務という事で日々、経営をしている。教育にも当てはまると思うので、是非、上手くいかない事を人のせいにならないで改革を進めていっていただければ大変、有り難い。

(終了)